

# アブデュルレシト・イブラヒム関係の新出史料

三 沢 伸 生

## 1. はじめに

本研究プロジェクトは東洋大学アジア文化研究所（前身は東洋大学アジア・アフリカ文化研究所）が収集してきた諸史資料につき、そのデータベース化を行い、本研究所のみならず広く公開して研究の深化・活性化に寄与すべく創始された。

長い研究所の歴史のなかで、日本のイスラーム研究に名を遺した研究者が所属していた。例えば内藤智秀（1886-1984）のような大久保幸次（1888-1950）と並ぶ日本のトルコ研究の先駆者、マルコポーロの旅行記写本を渉猟し、その書誌研究に業績を残した渡辺宏（1929-19??）などである。また研究者ではないが、日本人ムスリムの小村不二男（1912-1998）も一時期頻繁に研究所を訪れていたとのことである。

本稿は、本研究所プロジェクト推進途上にあつて、プロジェクト推進経過と併せて発見・収集した在日タタール人関係史料とりわけ、アブデュルレシト・イブラヒム（1857-1944）にかかわる新出史料の一部紹介をするものである。

## 2. 在日タタール人関係史料

筆者の個人的に在日タタール人に強い関心を抱くものであるが、残念ながら本プロジェクトに基づく調査の結果、今日至るまで本研究所に収蔵・遺蔵されている諸史資料のなかに、在日タタール人関係の史資料を見出すことは出来ていない。前述の内藤智秀は若くしてトルコ語を習得し、開設間もない駐イスタンブル日本大使館に小幡西吉（1873-1947）大使の通訳官として赴任され、その後には研究者に転身されたのであるが、大久保のように在日タタール人と親密に付き合っていたわけではなかったようである。内藤関係で見出されるのは、戦後において内藤が関係を有していた日本・パキスタン協会、日本イラン協会関係のものに限定される。本学においては研究よりも教育面において貢献されたとの伝である。

それゆえ在日タタール人関係史料としては、かつてその一端を本研究所の叢書として刊行した在日本タタール人関係の写真のように、筆者が本研究所に所属をして以来、日本およびトルコにおいて収取し始めた史資料に限定される。

## 3. アブデュルレシト・イブラヒム関係史料の発掘

日本におけるイブラヒム研究の創始者であり、最大権威である小松久男はイブラヒムの旅行記のうち日本部分を訳出した『ジャポニヤ』の改訂版において、イブラヒムに関わる内外の新出史資料、とりわけ逐次刊行物・公刊物内におけるイブラヒムにかかわる記述を呈示して、この間のイブラヒム研究の進展を示している。

その際に筆者も微力ながらも、『サンデー』（1908-1914年、太平洋通信社より刊行）『冒険世界』（1908-1919年、博文館より刊行、押川春浪ら早稲田大学関係者によって刊行されていた）に所収される各々1点の記事を見出した。

それでも依然として日本の記述史料の中に埋もれてるものがあるものと判断でき、今日まで偶発的に掘り起こされている。一例をあげれば、本研究所の客員研究員である福田義昭（大阪大学外国語学部専任講師）が、日本文学に残される在日イスラーム教の痕跡を調査する過程において、夏目漱石（1867-1916）の日記に以下のような記述を見出している。

〔明治42/1909年〕六月十六日水

陰。本間久。ダツタン人の回々教の管長と事を友にする天下の志士を連れてくると云ってくる。此人余が著述を好んで読むよし。奇人だから材料にしたらどうだと書いてある。』

〔夏目金之助1996『漱石全集』第20巻、岩波書店、49頁〕

文中にある本間久（18??-????）は『二六新報』の記者経験を有する小説家・翻訳家。1913年に東亜堂書房より『アラビヤナイト：全訳』を上梓しており、いつの頃からかイスラームに興味を持ち、来日中のイブラヒムないしは亜細亜義会関係者に接触を持ったものと思われる。天下の志士とは同会の中野常太郎（天心、18??-1928）なり大原武慶（1891-1933）であろうか。その後に本間がその志士なりイブラヒムなりを夏目に引き合わせたかどうかは確たるものではないが、イブラヒムの旅行記にも夏目の著作にも接点を見出すことは出来ないもので、実現はしていないのであろう。

このように埋没している記述史料の発見は、近年日本においても急速に進展しているも逐次刊行物・書籍など記述史料の電子化・デジタルアーカイブ化に負うことが大きい。今後もさらなる記述史料の発見が続くことが期待される。

公文書史料に関しては、トルコ共和国の総理府オスマン文書館（Başbakanlık Osmanlı Arşivi）ならびに総理府共和国文書館（Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi）においても収蔵文書の整理途上で、今後に閲覧に供される文書に新出史料が含まれる可能性がある。また日本でも外務省外交史料館・防衛省防衛研究所・国立公文書館・宮内庁宮内公文書館など、近年整理・電子化が著しく進展し、同じく新出史料が見いだされる可能性を有する。

その一方で、小松ら先駆的研究者によってイブラヒムが脚光を浴びることから、国内外の古書店・古物商により私文書史料として、イブラヒム関係の書簡・写真・パンフレットの類が市場に現れだしている。従前までは顧みられなかったものが、商品価値を高めて、市場に現れだしている。本稿で紹介する新史料とはこうした私文書史料である。

その一例として、巻末に付すように、近年、東京の某古書肆が作家であり、戦前戦中期は映画監督を務めた青山光二（1913-2008）関連の紙媒体史料を売り立て、このなかに青山が監督し、イブラヒムが出演した『東京ノ回教徒』関連のものが含まれていた。残念ながら、その全てを入手する訳にはいかなかったものの、映画の特別試写会パンフ（図1～3）、スチール写真（図4・5）のように、従前、存在は知られていたものの判然としなかった映画の内容の一端が分かった。映画は先ごろ取り壊された渋谷区代々木の東京回教学校の2階で日本人と在日タタール人イスラーム教徒の交流を描いたものらしい。同じ写真は不鮮明かつ来歴不明なまま、大日本回教協会所蔵写真資料（現在は早稲田大学中央図書館に寄託中）に含まれおり、かつて臼杵陽（日本女子大学）・店田廣文（早稲田大学）・筆者で作成した資料DVDでも確認できるが、近年、早稲田大学イスラーム地域研究機構によって製作されたネット上のデジタルアーカイブ「大日本回教協会旧蔵写真データベース」（URL：<http://photo-kaikyokyokai.w-ias.jp/>）で参照可能である。

またイスタンブールの古書肆にて入手した戦前・戦中期のイブラヒムがトルコに宛てた実通書簡が複数手元にある（図7・8参照）。書簡ゆえに個人情報に憚り、封筒のみを付したが、この封筒はイブラヒム専用の印刷封筒であり、封筒だけでもイブラヒムの日本での位置づけを物語る興味深い史料である。将来的に書簡資料についても個人情報の問題を解決しながら、データベース化して広く研究に供したく考えている。

#### 4. おわりに

本研究プロジェクトは、元来、オスマン語の逐次刊行物、より具体的には戦前期・戦中期の新聞史料のデータベース化を主目的としていたが、様々な紆余曲折を経て、イブラヒムをはじめ在日タタール人関係新出史料に関しても着手している。

国内外の学界内においていくつか反応があり、本誌研究動向欄に詳細が示されるように、とりわけ本年度は早稲田大学イスラーム地域研究機構との共同事業を進めることができた。

今後とも、本研究所を基盤にトルコ関係史料のデータベース構築ないしは近年組上に挙がっているデジタル・アーカイブ製作をはかっていきたい。

※本稿は、東洋大学井上円了記念研究助成：研究所プロジェクト「アジア諸言語史資料の汎用性データベース開発と構築」（拠点：アジア文化研究所，研究代表：三沢伸生，2016-2019年）の研究成果の一部である。

#### <参考文献>

- \*アブデュルレシト・イブラヒム；アブデュルレシト・イブラヒム著；小松香織，小松久男（訳）2013『ジャボンヤ：イブラヒムの明治日本探訪記』岩波書店 --（イスラーム原典叢書）。
- \*大澤広嗣2004「昭和前期におけるイスラーム研究：回教圏研究所と大久保幸次」『宗教研究』78-2, 493-516頁。
- \*東洋大学アジア文化研究所アジア地域研究センター（監修）2008『亜細亜義会機関誌「大東」（CD-ROM版 ver.1）』東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター。
- \*三沢伸生2001「亜細亜義会機関誌『大東』に所収される20世紀初頭の日本におけるイスラーム関係情報 --明治末期の日本とイスラーム世界との関係を考察する基本史料の紹介」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』36号, 60-75号。
- \*三沢伸生2014「1950年代における在日タタール人に関する史料：データベース化すべき私文書史料一例」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』48, 219-224頁。
- \*"Basic studies about the Turkish & Tatar Muslims in the modern Japan" project supported by Toyo University 2011, *Tokyo Muslim School (1927-1937)*, Asian Culture Research Institute, Toyo University.
- \*Nobuo MISAWA (ed.) 2012, *Tatar exiles and Japan : Kôji ÔKUBO as the mediator*, Asian Cultures Research Institute, Toyo University.

アジア諸言語史料の汎用性データベース開発と構築

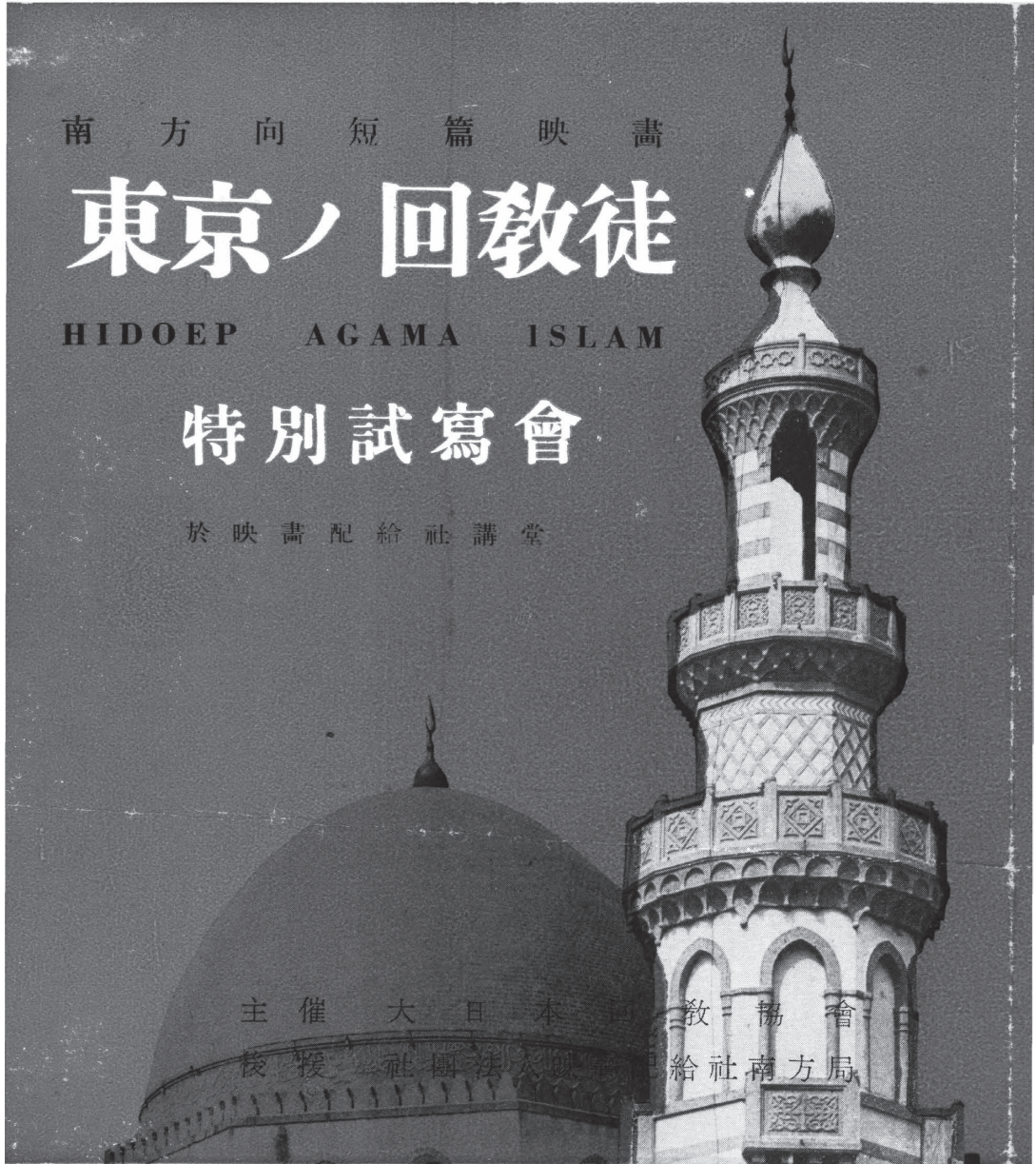


図1 映画『東京ノ回教徒』特別試写会パンフレット 表紙  
(※実色は緑色)



解説

本映畫は南方向専用映畫として企畫せられ、特に回教地域公開に於ける反響を期待せられてゐるものであるが、作品の性質上企畫着手にあたり、製作當事者は回教専門家數氏を訪問して、具さに意見を敲いた。が、特に製作に關し、監修の勞をとられたのは、申すまでもなく大日本回教協會である。而して、同協會々長回王天延孝中將、事務理事大村謙太郎氏並びに東京回教團々長松林亮氏の終始渝らぬ御指導と一方ならぬ御援助とに對しては、製作關係者一同の衷心より感謝するところである。

企劃意圖

南方民族にとつて宗教が如何に切實な問題であるかは、我が國の佛教に於ける場合等とは全く異り、眞に我等の想像を絶するものがあるであらう。科學よりも藝術よりも、宗教こそが彼等にとつては第一の生活信條である。而して、インドネシア六千萬の民の九割が回教徒であり、マライに二百萬、ビルマに六十萬、佛印、泰、フリツピンに各三十萬の回教徒の在ることは周知の事實である。更に印度の九千萬、滿洲の二百五十萬、支那の二千萬を併せ算するならば、全世界の回教徒の大半は、わが勢力圏内に住むとさへ稱し得るであらう。然らば、大東亞の首都である東京に本格的な回教寺院や回教學校があり、これをめぐつて在京三百名の諸民族回教徒が、降々たる帝國の國威のもと、安泰な宗教生活を享受してゐる事實を南方回教團に紹介することの有意義なるは言を俟たないであらう。この事によつて南方回教團民族が、樂土東京を眼底に描き、帝國への信頼を一層深めるに至るとするなれば本企劃の目的の大半は達せられたのである。茲に於て本映畫の意圖するところは、在京諸民族回教徒の生活の様態を動的に把握描出することによつて、帝國の民族的宗教的包容性を暗示せんとするにあり、併せて本年八月三十一日九十五歳を以て亦眠せる在留回教徒の長老アブ・アル・ラシッド・イブラヒム翁の生前のおもかげとその告別式の狀況とを記録して如上の意圖を一層強力に實現せんとするものである。因みにイブラヒム氏は、在伯林フセイン氏と親交あり、東西相呼應して回教民族の味方である輻軸國家の聖戦に幾力協力しありし人であり、且、共に全イスラム教界の聲を擡つて立つてゐた人である。以上の意味に於て、南方向専用映畫として本企劃の緊急且第一義のものたるを信じて疑はぬものである。

スタッフ

脚本	室町一郎
演出	森井輝雄
撮影	井上莞
	大小島嘉一
	菊池清
作曲指揮	本城久雄
監修	深井史郎
製作	日本交響樂團
配給	大日本回教協會 株式會社朝日映畫社 社團法人映畫配給社

図2 映画『東京ノ回教徒』特別試写会パンフレット 1頁目

梗概

日本に在住する回教徒について

本映画の構成は大體三部より成つてゐる。第一部は東京在住回教徒の平和な生活を主題とし、東京回教團々長松林氏、同副團長リハラ氏、代々木大山町の回教学校等に出張撮影を行った。因みに、回教学校教師ハリダ・ワハブは、故イブラヒム長老の信頼厚かりリハラ氏の長女である。

第二部は、イブラヒム翁の略歴を示す字幕を以て始まり、偉大なイブラヒム翁の生涯を追慕讃嘆せんとする感懐な記録画である。

即ち昭和十九年五月十九日、回教学校講堂に催されたイブラヒム翁九十五歳の長壽祝賀會の風景並びに、同年九月三日モスクに於ける翁が告別式の記録を此の部分に収めた。

第三部に於ては日本帝國が回教並びに回教徒に對し如何に共感を寄せ、擁護の手を差し延べてゐるか、その事實の一部を畫面によつて紹介し、故イブラヒム翁の日本をして回教徒の邦土たらしめんと切なる念願も、今や着々實現されつつあるを明ならしめんとした。而して、日本帝國の回教徒への援護を代表するものは大日本回教協會であり、大東亞回教團に向つて近く解放されんとする回教會館は、日本と回教團とを結ぶ中樞機關ともなるべきものである。

在日回教徒の数は千名内外であり、その大半はトルコ・タール族回教徒、その數約六百である。東京、名古屋、神戸、釜山、京城等の各都市及び樺太に在住するこれ等トルコ・タール族回教徒は、從來主として商業に従事して平和な生活を送り、中には在日二十年以上に及ぶ者も居る。

彼等は、故イブラヒム長老を中心として、犧牲祭斷食祭を始め年數度の祭事の執行は勿論、斷食行事に、毎金曜日の禮拜に、何の不自由も感じてゐなかつたが、今夏イブラヒム翁の逝去により、精神的支柱を失ひ一同悲歎にくれたのであつた。然し現在では、以前にも増して團結を鞏固にして大東亞戰爭を勝抜かうと必勝の決意を固めてゐる。

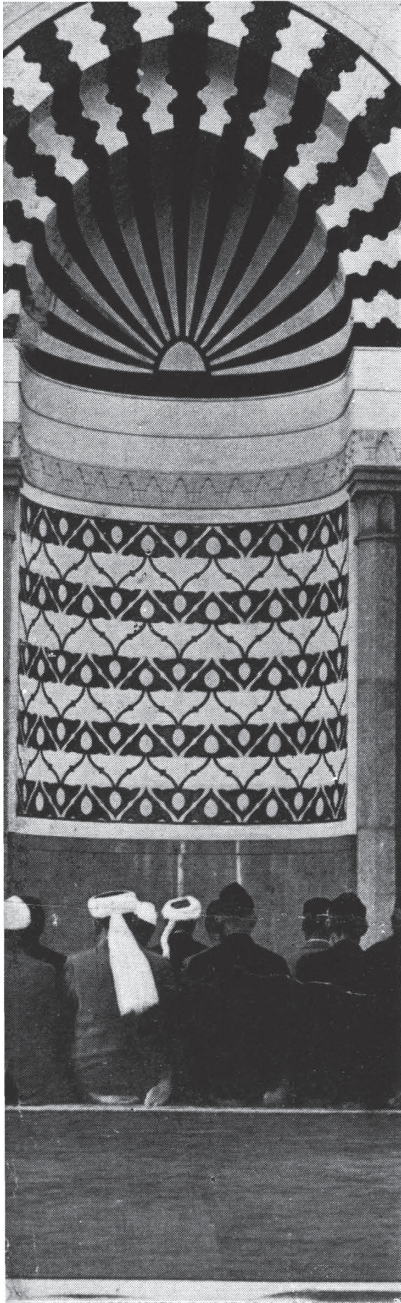
滿洲、中國及び蒙古等の大陸出身の回教徒の大部分は、新アジア建設の希望に燃える若き留學生達である。大部分は集團的に起居して、夫々専門の學術技能を修め、激しい訓練にいそんでゐる。

次に東印度諸島、マライ半島を中心とする南方各地出身の回教徒であるが、これら殆んど全部が留學生であり、何れも主として出身地別に規律ある集團生活を営んでゐる。此等大陸及び南方の留學生に對し、帝國政府は出来る限りの援助と指導とを惜しまず、民間の各種團體及び一般人士も亦よく、回教の特殊性を認識し、陰に陽に積極的な支援を與へ、留學目的の達成に遺憾無からしめんとを期してゐる。

最後に日本人にして回教徒たる者數十名、その大部分は既に大陸及び南方に出勤し、日回提携、新大東亞建設の尖兵として挺身してゐる。

モスクは現在、東京、名古屋、神戸、京城の四個所にあり、教徒は此等モスクを中心として、夫々團體を組織し、各種行事を行つて居るが、最近各地の教團を打つて一丸とする聯合教團設立の機が熟し、目下その準備が進められてゐる。

——大日本回教協會調査部稿



アジア諸言語史資料の汎用性データベース開発と構築

図3 映画『東京ノ回教徒』特別試写会パンフレット 2頁目



アジア諸言語史資料の汎用性データベース開発と構築



図4 & 5 映画『東京ノ回教徒』撮影時に撮られたスチール写真

アジア諸言語史資料の汎用性データベース開発と構築

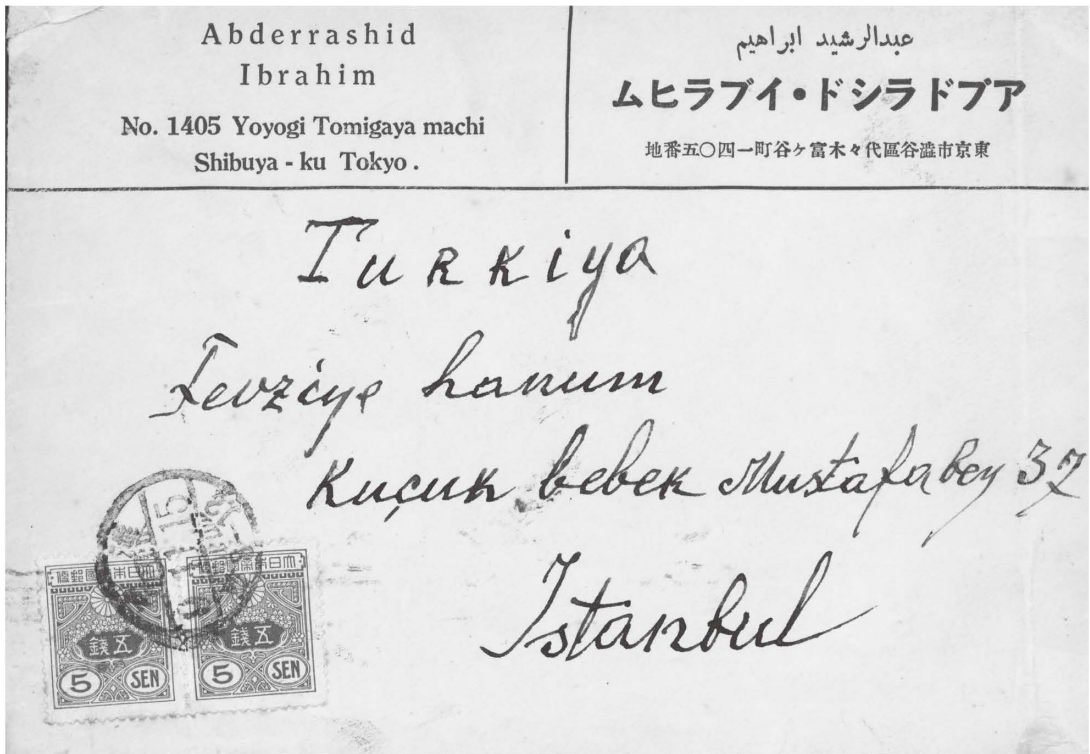


図 6 & 7 イブラヒムよりイスタンプルのFevziye Hanımに宛てられた実遞書筒の封筒